

英語教育における翻訳 (TILT: Translation and Interpreting in Language Teaching) の意義と位置づけ (CEFR による新たな英語力の定義に関連して)

染谷 泰正^A, 河原 清志^B, 山本 成代^C

アブストラクト: 通訳翻訳をコミュニケーションのための言語活動として初めて正当に位置付けた「ヨーロッパ言語共通参照枠」に言及しながら、我が国の大学教育における通訳翻訳教育の今日的意義と位置づけについて議論する。まず、英語教育において「訳」が忌避されてきた経緯をたどり、その根底にあるモノリンガリズム信仰とこれにともなう L1 排除の功罪について議論する。続いて、いわゆる文法訳読方式における「訳」と「翻訳」の本質的な違いについて論じたうえで、TILT の教育的意義について明らかにする。

キーワード: 通訳翻訳, CEFR, TILT, 文法訳読方式, モノリンガリズム信仰

1 外国語教育における「翻訳」の扱い

外国語を学ぶ過程で、これをいったん学習者の母語 (L1) に変換して理解するという意味での「翻訳」(translation) 行為は、学習のどの段階においてもほぼ必然的に伴うものである。それにもかかわらず、現在の英語教育や応用言語学、およびこれに理論的基盤を与えてきた第二言語習得論の分野では、翻訳は研究対象としても語学教育の方法論としても完全に無視されてきたといつてよい。

例えば、1998 年に出版された *Encyclopedic Dictionary of Applied Linguistics* には、翻訳に関して “Translation in language teaching” という項目がわずかにひとつあるのみで、ここには “Although continuously in use, translation in language teaching has been dismissed by almost all twentieth-century theories and methodologies. [...]” と記されている。第二言語習得論の分野ではこの傾向は一層はっきりしており、定評のある *Handbook of Second Language Acquisition* にはそもそも翻訳に関するエントリ自体がない。周知のとおり、現在の応用言語学やその下位分野である英語教育学は、主として SLA 分野の研究成果をその理論的基盤にしていることから、この分野で翻訳が完全に無視されていることの意味合

いはかなり大きなものがあると言わざるをえない。

翻訳は、なぜこのように無視されてきたのだろうか。この点について、前述の *Encyclopedic Dictionary of Applied Linguistics* では次の 4 点をその主な理由として挙げている (以下、主として英語および英語教育を対象として議論する)。

- 1) 文法訳読法 (Grammar-Translation Method) 授業への批判
- 2) 書き言葉から話し言葉への関心の変化
- 3) 言語習得における「自然主義」神話
- 4) 翻訳に対する誤解

このうち、一般にもっとも大きな理由として考えられているのは 1 であるが、実はこの批判は英文テキストを読んで「訳す」という作業を、単にテキストの語彙や構文上の形式的な理解を確認するための手段＝必要悪＝と見做し、その結果、およそ日本語としての体裁をなさないような奇妙な「訳」(したがって理解のありよう) をそのまま放置してきた、いわゆる「旧態依然とした文法訳読式の授業」(隈部 2002) に向けられた批判であり、文法訳読法という指導方法そのものが批判されているわけではない。テキストを正確に読むためには「文法」の理解が必要であり、理解した内容を母語で的確に再表現する訓練は、ごく表面的な意味から、より深い意味の解釈に至るための「ことばへの意識」や「異文化への意識」あるいは L1 と L2 を

A: 関西大学外国語学部

B: 金城学院大学文学部

C: 創価大学ワールドランゲージセンター

結ぶ「共通基底言語能力」(Cummins,1980)を鍛えあげるための格好の契機であり、いずれもそれ自体としてはごく正当なものである。

一方で、文法の明示的な学習は不必要で、母語は教室から排除すべしという考え方も一部に根強く残っている。これが上記3の立場であり、いわゆる「ナチュラル・メソッド」から、「コミュニカティブ・アプローチ」につながる系譜を代表する考え方である。言語習得における「自然主義」の特徴は、子どもの母語習得をモデルとして外国語教育を考えるとところにあるが、それがひいては「英語は英語で」というモノリンガリズム(単一言語主義)とネイティブスピーカ教師絶対主義につながっていく²⁾。しかし、ほとんどの外国語学習者はすでに母語を獲得しており、「子供のように」というメタファーは学習者の実態やその主体性を無視した考え方である。さらに、外国語学習者はその定義上、母語話者にはなれないものであり、母語話者を絶対のモデルとする教育観は、そもそも最初から破たんしていると言わざるをえない。

4つ目に、「翻訳」に対する誤解がある。ここでは翻訳とは何かについて十分に議論する余裕はないが、ひとつと言えることは、一般に「文法訳読式」授業における「訳す」という行為で要求されているものは、対象となる外国語の記号レベルでの解読、およびこれにともなう表層的な記号変換作業(transcoding)であり、本来の「翻訳」(translation [translation proper])とは似て非なるものだという点である。現在の英語教育に見られるのは、この2つの区別ができないまま、transcodingに対する批判がtranslationに対する批判にすり替わり、結果的にtranslationが否定されるという図式である³⁾。

以上、英語教育において翻訳が無視されてきた主な理由について概観したが、2を除いていずれも根拠がないか、あるいは間違った目標設定に基づくものあることがわかる。このような状況は、日本ばかりでなく世界的に共通した現象であるが、21世紀に入ってから翻訳を再び見直そうという機運が高まってきている。これがTILT(Translation in Language Teaching)と呼ばれるものである⁴⁾。

2 CEFR による言語能力の再定義

そのひとつの重要なきっかけになったのが、欧州評

議会が制定したCEFR(ヨーロッパ言語共通参照枠[初版1996年、2001年に大幅改定])である。CEFR(2001)では、コミュニケーションのための言語活動を、従来の「聞く」「話す」「読む」「書く」という伝統的な枠組みに代わって、以下の4つに分類し、その上でこうした言語活動を行うためにはどのような能力が必要なのかについて詳述している。

- 受容能力(reception): 読んだり聞いたりする受動的な能力
- 産出能力(production): 書いたり話したり、プレゼンしたりする能動的な能力
- 相互作用能力(interaction): 人との会話に参加したり交渉したりする力(相手に適切に反応しながらコミュニケーションの場を自ら作っていく力)
- 仲介能力(mediation): (主として異言語・異文化間の)コミュニケーションを仲介する能力(翻訳・通訳、要約、書き換え[言い換え]などの能力)

このうち最初の3つはとくに目新しいものではないが、4つ目の「仲介能力」は従来、外国語能力を構成する要素として考慮されてこなかったものである。欧州評議会がこのような提案をした背景には、欧州という地政学上の特殊性を反映した複言語主義があるが、いずれにせよ、これによって通訳翻訳を含む「仲介活動」(mediation activities)がコミュニケーションのための正当な言語活動として初めて位置づけられ、学習者が修得すべき技能として明確に規定されたことになる。

このことは、かつて外国語教育において暗黙の前提となっていたモノリンガリズムや、これにともなう学習者母語の排斥、あるいはネイティブスピーカ教師絶対主義という言語教育イデオロギーは、少なくとも欧州においてはもはやその存在基盤を完全に失ったということでもある。

3 TILTは何を目指すのか

TILTとは、ひとことで言えば外国語教育における翻訳(および通訳)教育の復権を目指す主張であり、その実現に向けた教育運動である。英国におけるその先駆者がコミュニカティブ・アプローチの泰斗であるHenry Widdowsonであり、これを引きついだのがその弟子のGuy Cookである(Cook, 2012)。2008年にはアイルランドで“Translation in Second language Teaching and Learning”と題する国際会議が開催さ

れ、世界各地から多数の研究者・教育者が参加している (Witte, Harden, & Harden, 2009)。

ただし、TILT は、かつての文法訳読式授業の単なる復活を目指しているわけではない。復権させようとしているのは、伝統的な文法訳読式の授業が「本来」持っていた理念、つまり正確な読解能力やメタ言語能力⁵⁾の養成、あるいは外国語との格闘を通じた知的訓練といったよき伝統であり、これを通じて、他者の思考をより深く理解しようとする姿勢を養うと同時に、自からの思考を的確かつ簡潔に表現する能力を養成することである。

外国語を(あるいは外国語を通して物事を)学ぶことの大きな利点のひとつは、日ごろ慣れ親しんだ母語によって無意識のうちにパターン化された思考や世界観を、まったく新しい枠組みから眺める格好の機会を提供してくれることにある。

われわれのこれまでの経験では、外国語を母語を通して再構成し、同時に母語を外国語を鏡として客体化するという通訳翻訳のプロセスを通して、学習者の英語と日本語の運用力は、年間を通じて明らかな成長を示すのが通例である。通訳翻訳の訓練がL2習得に効果がある理由は、Cumminsの「言語相互依存仮説」で説明できる。要するに、英語を日本語に翻訳し、あるいは日本語を英語に翻訳するという作業を通じて、言語の「深い処理」ができるようになり、これによって学習者の基底言語能力が強化されるとともに、L2の習得が促進されるのである(染谷2010)。

なお、言うまでもなく、TILTの主張は会話能力を重視するコミュニカティブな外国語教育の否定にはつながらない。教育現場におけるTILTの推進はコミュニカティブ・アプローチと排他的な関係にあるものではなく、両者は、より健全な言語能力の発達に向けて相互補完的な役割を果たすものである。

4 モノリンガリズムでの授業運営の問題点と展望

前述のとおり、「英語は英語で」というモノリンガリズムにおいては、ネイティブスピーカー教師が絶対である。その中で、NNS(ノンネイティブスピーカー)教師はどのような授業をしていくべきだろうか。NS(ネイティブスピーカー)教師と同じ土俵に立って授業をする場合、NNS教師は、母国語を使用しないで授業をするという精神的負担から常に解放されることはな

い。学習者は多くの英語にさらされることが英語力増強の一番の近道だという論理を、これまで疑うこともなく、多くのNNS教師は直接教授法を行ってきたのではないだろうか。インプット仮説(Krashen,1985他)、アウトプット仮説(Swain,1985他)、相互交渉仮説(Long,1983他)といった様々な第二言語習得理論に基づき、教室内で英語のみを使用することが最適な指導法だと信じられてきた。もちろん、学習者により多くの英語使用を促すことは、彼らの英語コミュニケーション能力ばかりでなく、全般的な英語力を高めるのに貢献することは間違いないだろう。しかし、そういった授業運営の中で、NNS教師の母語使用が完全に排斥されることは、NNS教師の利点をも排斥してしまうことになるのではないだろうか。

山森(2007,p.163)は、金谷(2004)の説明を引用しながら、英語教師が授業をすべて英語で行えば生徒の英語力が伸びる(直接効果)というよりも、英語を使用する教師の姿勢に生徒の学習意欲が喚起されるなどして(間接効果)、生徒の英語力育成に好影響を及ぼすと述べている。しかし、この「すべて英語で行えば」という箇所には、一筋縄ではいかないNNS教師が背負うものが含まれている。まず、文法説明や抽象的な語句の説明を英語で行うことの非効率さや、それに伴う労力は、避けては通れない部分だろう。

第二言語習得理論の中で、Nation & Newton(2009)のThe Four Strands⁶⁾という理論は、そういった非効率さやNNS教師のジレンマをうまく解消してくれるものだと言えよう。この「4つの要素」のうちの1つとなっているLanguage-focused Learning(言語に焦点を当てた学習活動)では、語句や文法の学習での母語の使用を否定していない。学習方法の1つとして翻訳も挙げられている。この理論では、バランスのとれた英語授業運営が提示されており、4つの要素をうまく織り込みながらNNS教師ならではの英語授業を展開することができる。バランスのとれた授業を展開していくには、これまでの直接教授法で研究されてきた数多くのタスクなどを取り入れながら、文法説明や語句説明、あるいは英語と日本語の間に横たわる様々な「差異」に学習者の注意を喚起するための指導(これも広い意味での「仲介活動」である)においては、母語を適切かつ効率よく使うことが必要となってくるであろう。

モノリンガリズムにおいて、母語使用を排除するように仕向けられてきた NNS 教師だが、ある意味、真の意味でバランスのとれた授業展開ができる資質を持っていると言えよう。このことは、従来の訳読式授業に戻るということを意味するのではなく、コミュニケーション・アプローチの良さを継承しながら、母語（およびこれをベースにした認知能力）という学習者の資産をより効果的に活用していくということである。

5 まとめ

従来、翻訳や通訳といった母語を介在させる活動は、目標言語による音声コミュニケーション重視の昨今の外国語教育の中で正面から論じられることが少なかった。しかし、実は通訳翻訳はコミュニケーション行為そのものであり、とりわけ現代社会において重要な「異文化コミュニケーション」にかかわる諸問題をもっとも鮮明かつ多角的に体験できる格好のエクササイズなのである。その意味で、筆者らは国内外における TILT への関心の高まりを大いに歓迎している。今後は、正しい目標設定に基づく標準的な「授業モデル」と、現場のニーズに対応した適切な教材開発が急がれる。

注

- 1) 1 については、実は日本で行われてきた外国語読解の方法論は、阿蘭陀通詞の時代から幕末、明治初頭の英学全盛の時代、およびその後の長い歴史の中で独自に発展してきたものであり、西洋流の Grammar-Translation Method とはかなり異なったものなのであるが（杉本 1990, 平賀 2005）、この点については稿を改めて論ずることにしたい。
- 2) 英語教育におけるモノリンガリズムとネイティブスピーカ教師絶対主義は、英米の語学産業の市場戦略とも密接に結び付いている。個々の学習者の母語に対応した外国語教育は、教師の養成に時間とコストがかかるばかりでなく、テキストの販売規模という点でもビジネス的にはうまみがないのである。
- 3) 翻訳に対する従来の批判的な見方は、「翻訳」と「訳読」という本質的に異なる作業を同一視することから生まれていることが多い。その意味で、TILT に関する議論を進めていくに当たっては、この 2 つを明確に定義しておく必要がある。以下に、筆者らの暫定的な定義分けを示す。
訳読（英文和訳等）＝原文の語句や文構造を「正しく」理解できているかどうかを確認するための手段。原則として訳文の質は問わない（意味が通じていればよしとする）。コミュニケーションという視点はなく、もっぱら自分または教師のために行う作業である。

しばしば、「学校訳」(classroom translation) とか「教育訳」(pedagogical translation) とも呼ばれる。**翻訳**＝原文の語句や文構造を的確に理解した上で、これを目標言語を使って第 3 者にわかりやすく伝えることを目的とする（起点テキストの著者と翻訳読者とのコミュニケーションの仲介）。起点テキストの「意味」をより正確に伝えるために、「言語的に埋め込まれた意味」に加え、しばしばこれを超えた「言語外の意味」を回復する必要性に迫られる作業である。

- 4) TILT は翻訳のみでなく、口頭翻訳という意味での通訳も含む。したがって本稿の表題にもあるとおり、TILT = Translation and Interpreting in Language Teaching と表記する場合もある。
- 5) ここでいう「メタ言語能力」とは、言語および言語使用について客観的に振り返り、分析する力、という意味である。
- 6) The Four Strands (of a balanced language course) は、(1) Meaning-focused Input (2) Meaning-focused Output (3) Language-focused Learning (4) Fluency Development の 4 つから成り、これらをバランスよく行うことを提唱している。

引用・参考文献

- 1) Cook, G. (2010), *Translation in Language Teaching: An argument for Reassessment*, Oxford University Press.
- 2) Cummins, J. (1980), *The Construct of Language Proficiency in Bilingual Education*. In *Current Issues in Bilingual Education*. James Alatis (ed.), Georgetown Univ. Roundtable.
- 3) Doughty, C. J. & Long, M. H. (2003), *Handbook of Second Language Acquisition*, Blackwell.
- 4) 平賀優子 (2005) 「『文法・訳読式教授法』の定義再考」日本英語教育史研究第 20 号: 7-26.
- 5) Johnson, K. & Johnson, H. (1998), *Encyclopedic Dictionary of Applied Linguistics*, Blackwell.
- 6) 金谷憲 (2004) 「『オールイングリッシュ絶対主義』を検証する」『英語教育』3 月号, 52(13): 8-10.
- 7) 隈部直光 (2002) 『教えるための英文法』リーベル出版
- 8) Nation, P. & Newton, J. (2009), *Teaching ESL/EFL listening and speaking*, Routledge.
- 9) 染谷泰正 (2010) 「大学における翻訳教育の位置づけとその目標」関西大学外国語学部紀要第 3 号: 73-102.
- 10) 杉本つとむ (1990) 『長崎通詞ものがたり: ことばと文化の翻訳者』創拓社
- 11) 山森直人 (2007) 「英語授業において教師が使用する英語の教育的機能」鳴門教育大学研究紀要第 22 巻: 161-174.
- 12) Witte, A., Harden, T. & A. R. Harder (2009), *Translation in Second Language Learning and Teaching*, Peter Lang.